

第61回北関東医学会総会抄録

特 別 講 演

東日本大震災被災地における子どもの健康課題

—— 被災地学校訪問から ——

群馬大学大学院保健学研究科看護学講座 佐 光 恵 子

2011年3月11日、東北地方から関東地方に至るまでの東日本にもたらされた未曾有の大地震と津波、さらには福島原子力発電所の爆発事故は未だに終息を見ず多くの被災者が苦しんでいます。私は先の勤務地である新潟にて2007年7月に新潟県中越沖地震を体験し、それを契機に小児・学校保健の視点から、災害時の児童生徒の健康課題や学校保健室や養護教諭の役割機能に関する研究をスタートしました。研究の一端を紹介させていただきます。

- 1) 新潟県中越沖地震における養護教諭の実践活動と学校保健室の機能について — 養護教諭へのインタビューによる質的分析から —

[公衆衛生雑誌, 第58巻4号 p274-281, 2011]

- 2) 災害時における学校保健室の役割と施設備品に関する考察 — 地震災害を経験した新潟県養護教諭の自記式質問紙調査から —

[欧文 School Health, Vol7, p44-54, 2011]

- 3) 東日本大震災直後の学校避難所における養護教諭の対応 — 都市型震災を想定した学校と地域との連携 — [群馬大学教育学部紀要, 体育・生活科学編, 第48巻, p135-143, 2013]

- 4) 養護教諭がとらえた東日本大震災後の児童生徒の健康状態と養護教諭の健康支援活動 — 養護教諭のイ

ンタビュー調査から —

[学校保健研究, 第55巻5号, p446-457, 2013]

- 5) 養護教諭がとらえた東日本大震災後の児童生徒の健康状態と養護教諭の健康支援活動第2報 — 養護教諭のインタビュー調査から —

[学校保健研究, 第56巻3号, 2014]

- 6) 災害時に養護教諭が行う児童生徒への健康支援に関する研究動向と今後の課題

[学校保健研究, 第56巻3号, 2014]

1). 2) は、平成20-22年度の科研費基盤研究(C)課題番号: 20530767)「新潟県中越沖地震における非難所としての保健室と養護教諭の役割に関する緊急的研究」の助成を、3) - 6) は、平成24-25年度の日本学校保健学会特別研究「東日本大震災で被災した児童生徒への心身のケアにおける養護教諭の援活動の実態と今後の課題 — 全町避難を余儀なくされた福島県双葉郡の養護教諭へのインタビュー調査から —」の助成を受け実施いたしました。

本講演では、被災後から現在までの、福島県における東日本大震災・原発による避難住民を対象とした訪問健康調査支援活動や被災地の学校訪問活動についても紹介させていただきます。

癒し技法としてのタッチの看護への活用

群馬大学大学院保健学研究科看護学講座 近 藤 浩 子

身体に痛みを感じた時、そこに手をあててさすっていると少しずつ痛みがやわらいでいくということを私たちは経験的に知っている。手をあてるといふ行為には、人を癒す力がある。この癒しの力を看護に活用するために、

演者は看護学生の協力を得て「癒し技法としてのタッチ」の研究を行ってきた。

研究に参加した看護学生は、自分の身体に手をあててもらうことによって、また人の身体に手をあてること

よって、人の手の暖かさ、心地よさを感じ、気持ちが穏やかになったと述べていた。生理的評価においても、指先温度の上昇や、交感神経活動の指標である LF/HF の低下、副交感神経活動の指標である HF の上昇がみられ、タッチを受けている者とタッチを行っている者の双方に、リラクセーション反応がみられていたことが分かった。

このタッチの経験は、その後の臨地実習の中で生かされているのであろうか。実験に参加した学生にインタビューしたところ、その答えは半々だった。患者さんに楽になってもらえたらと思って肩に触れていたら患者さんが気持ちよさそうにうとうとしたというように実際に活用できた学生と、自分の課題に精一杯で、タッチのこ

とを思い出すこともなかったという学生がいた。

癒し技法としてのタッチは、ただ相手の身体にふれればよいというものではない。タッチをする者が自分の心身の状態を安定させ、相手が最もよい状態になることを意図して相手の身体にそっと手をおく。これは生まれたばかりの子どもを抱く母親のように、ケアの原点に戻って人にふれることなのかもしれない。しかし多くの任務を課せられる看護の臨床で、このようなケアを行うことは難しいのであろうか。

本講演では、タッチを通して実践する癒しについて、患者を癒すとともに、自分自身を癒すことについてお話させていただきたいと考えている。

Olig2 と脳腫瘍の病理診断

群馬大学大学院医学系研究科病態病理学 横 尾 英 明

細胞あるいは分子レベルでの様々な異常の総和が組織や細胞の形態に反映されるという考えから、病理学では「かたち」の持つ意義が重要視される。このような基本原理に従って様々な疾患が記述され、それらが種々の疾患概念の基盤として受け入れられてきた結果、病理診断は最も確かな疾病診断手法として不動の地位を確立するに至った。ただし、病理学的知見の多くがホルマリン固定パラフィン包埋された臓器組織の所見に基づくために、避けて通れない制約も存在する。例えば病理学分野で盛んに実施される免疫組織化学において、当該抗体がパラフィン切片で使用可能かどうかは我々病理医にとって重大な関心事である。

神経系を構成する細胞を適切に同定することは神経研究における最も基本的な作業であり、免疫組織化学がその中核を担っていることは疑いない。オリゴデンドロサイトは中枢神経系に局在するグリア細胞の一種で、脳腫

瘍をはじめとして種々の疾患にも関与する細胞である。臨床検体（パラフィン切片）における同細胞の免疫組織化学的同定法の確立は長年待望されていたが、ニューロンやアストロサイトなどのその他の神経系細胞と比較すると大幅に遅れて、問題の解決は 21 世紀まで持ち越された。演者はこの課題に年余にわたり取り組み続け、オリゴデンドロサイトの発生を制御する転写因子である Olig2 に着目し、その抗体が有用なマーカーになることを見出した。演者の開発した Olig2 抗体は国内外で市販されて約 10 年が経過し、現在では脳腫瘍の病理診断においてルーチンで用いられる抗体として広く普及している。講演では Olig2 抗体の開発から病理診断への応用についてお話させていただくとともに、神経科学の専門家との対話を通して今後の研究課題について議論することを望んでいる。

難治性神経疾患克服を目指して

群馬大学大学院医学系研究科脳神経内科学 池 田 佳 生

神経内科の臨床で扱う疾患には、頭痛疾患やめまい、しびれといった common disease はもとより、高齢化社会を迎えて患者数が急増しているアルツハイマー病を主とする認知症や脳卒中など社会的要請度の高い疾患を担当している。また、根本的治療法が未だ確立していない神経内科領域の難治性疾患、つまりパーキンソン病、脊

髄小脳変性症、多系統萎縮症、筋萎縮性側索硬化症といった神経変性疾患や、重症筋無力症、多発性硬化症といった神経免疫疾患も担当し、これら神経難病の克服へ向けた医療貢献は神経内科医の使命であると認識している。

アルツハイマー病 (AD) の A β カスケード仮説に基づ